

ゆらぎの深淵を求める旅路

横山 正博

要約：ソーシャルワーク教育・実践・研究におけるこれまでの歩みを、「ゆらぎ(yuragi)」という視点から振り返りました。ソーシャルワークおよびソーシャルワーク教育の現場では、言語化されない感情やためらい、不確かさに直面する場面がしばしばあります。こうした経験を「ゆらぎ」として概念化し、詩的表現と学術的探究の双方を通して理解しようとしてきました。

さらに、地域包括ケアシステムに関する研究においては、多職種連携の過程にも多様な「ゆらぎ」が生じているという仮説を立て、そのような「ゆらぎ」こそが、関係性を深める契機となりうると考えています。今後は、介護現場で働く人々が経験する「ゆらぎ」を言語化していきたいと考えています。不確かさの中でゆれ、彷徨いながらも、クライアントのそばに立ち続けるという姿勢こそが、ソーシャルワークの本質であると確信しています。

Key words：ゆらぎ 彷徨う ソーシャルワーク

はじめに

大学教員として携わってきたソーシャルワーク教育・研究・実践を、「ゆらぎ」という視点から改めて見つめ直してみました。ソーシャルワークには、理論や制度では捉えきれない不確かさや迷いが常にともないます。詩的表現、教育実践、実証研究を往還しながら、「ゆらぎ」を欠如ではなく、人が生きる現実に向き合う過程として捉え直しました。定年退職にあたり、これまでの歩みを省察するとともに、これからの学びと実践の展望についても記したいと思います。

1. 「ゆらぎ」とソーシャルワーク

これまで、ゆれ動く人間の心と、社会のひずみのあいだにかすかに生まれる「ゆらぎ」を見つめてきました。制度という枠組みを確かめつつ、その隙間にひそむ声なき声に耳を澄ませ、専門性と人間性が交わる地点にソーシャルワークの真の輪郭を探してきたのだと思います。

大学教員としての34年間(宇部短期大学時代を含む)、高齢者福祉やソーシャルワークのあり方を学生とともに学んできました。授業では、人と

人が出会うところに生まれる「関係の質」こそがソーシャルワークの核心と位置づけ、相手の世界観や沈黙の奥にある思いに心を寄せることの意味を学生とともに探求してきたつもりです。しかし、どれほど丁寧に向き合っても、他者の思いを完全に理解することは叶いません。その限界にふれるたび、言語化を拒む余白がいつも胸に残りました。

その余白の正体こそが、人の心にゆらめく「ゆらぎ」なのだ考えるようになりました。沈黙の底でかすかに震え、時に感情を波立たせる、複雑で繊細な振動。その「ゆらぎ」の中には、人が確かに生きている証としての希望が潜んでいるように思えてなりません。「ゆらぎ」こそが人を人たらしめるもの。その深淵を見つめ、ソーシャルワークの本質を問い直す営みを、これからも続けていきたいと願っています。

この「ゆらぎ」をソーシャルワークの基盤として論じた尾崎新は、支援者の「ゆらぎ」を「感情や判断が動揺し、迷い、見通しのなさに直面し、自らの無力さを感じる状態」と説明しています¹⁾。その「ゆらぎ」は外見上、しばしば沈黙として現れます。さらに尾崎は、「まったくゆらがない援

助」は硬直した実践にすぎないと断じました。挫折や葛藤、社会の矛盾に向き合いながら支援者自身もゆれ動く—この経験こそが、生活のリアリティを照らし出す契機になるのだと説いています。

最近、この「ゆらぎ」を別のかたちで描いてみたいと考えるようになりました。それが詩です。詩は、理論やエビデンスでは届かない心の深層にふれ、その底に息づく感情を掬い上げる営みです。少し大げさかもしれませんが、「ゆらぎ」の微細な震えを取りこぼさず、希望の余白を静かに掬い上げ、なお言葉の外にとどまるものを形にしよう

とする試みです。

この背景には、詩人・故国兼由美子さんの作品があります。国兼さんは県民愛唱歌「みんなのふるさと」の作詞者であり、山口県認知症を支える会連合会の会長を長年務められた方です。20年来、認知症グループホームの第三者評価活動等を通じて一緒に仕事をさせていただき、いつもそのお気遣いと情熱に励まされてきました。

国兼さんの遺された詩の中に、実際の介護経験を綴ったものがあります。

【殺意】（詩集『恍惚の風景Ⅱ』国兼由美子 1999年）

母に殺意をいだいてから
巨大な岩の夢ばかり見るようになった
中天に浮いている巨大な岩がすこしづつ壊れていき
たくさんの小さな岩になって
眠っている私の胸の上をころがる
ともかくものすごい重さに
苦しくなり汗びっしょりになって目がさめる
闇の中を手さぐりで
電気のスイッチをひっぱる
ベッドを見ると 安心しきった母が寝息をたてている
私はその母の顔をじっと見つめる
不思議な戦慄が
わたしの胸をおぞましく怯えさせる
夢ではないはずなのに 母が巨大な岩に変わっていく
夜 カラスの鳴き声が聞こえる
砕けた岩の先が胸を刺す
不安が渦を巻きはじめる
自分が狂ってしまって
この事で母を殺してしまうかと
その恐ろしさに
目を光らせくちびるをかみしめ
予感が汗のように私の全身を流れる
たしかに私は母を殺すかもしれない
私の中の私の気持ちを
私の外の私の気持ちが
ものの見事に打ち消してくれるのを待つ
※本文はたて書き

【介護】(詩集「恍惚の風景Ⅱ」国兼由美子 1999年)

おざなりでなく
心をこめて
おもらしをぬぐうと
あなたが笑ってくれた
私も笑った
※本文はたて書き

この二つの詩を、毎年「高齢者福祉論」の講義の冒頭で学生たちに紹介してきました。「殺意」では、介護に向き合う娘の心が母の存在の重さに押しつぶされそうになる壮絶な「ゆらぎ」と避けがたい葛藤が描かれています。巨大な岩の夢は、逃れられない介護の重圧そのものを象徴していると思います。

一方で「介護」は、厳しい日常の中にも、心を込めた行為が母の笑顔を呼び起こし、自身も笑い返すという小さな希望を映し出しています。介護とは苦しみだけでも、希望だけでもない。国兼さんの詩は、その真実を鋭く繊細に、しかし静かな迫力をもって語りかけ、人間への深い洞察を突きつけます。この言葉の力が、詩を書いてみようと思う道標となり、背中を押してくれました。

さらに詩作の中での言葉を探る営みにAIを用いるようになりました。AIは、人間の情動が織りなす複雑な風景に背後から光をあて、ともに言葉の海を進む羅針盤のような存在です。AIと向き合い、対話しながら言葉を探る過程は、自分の中に沈んでいた感情の層を少しずつ開き、これまで届かなかった表現へと導いてくれます。

これまで出会ってきた人々の沈黙や、表情の奥に潜んでいた「ゆらぎ」を、丁寧に一つひとつ言葉にしていきたいと考えています。そして若い世代の方々には、どのような状況にあっても希望を見失わないでほしいと願っています。「ゆらぎ」のなかにこそ、未来を見つめ続ける力が潜んでいる—その確信を胸に、これからも言葉を探し続けていきたいと思っています。このように詩を書くことは、人の生のゆらぎにふれ、ともに彷徨い、寄り

添い、意味を紡ごうとする営みであり、ソーシャルワークそのものだと思います。

引用文献

- 1)尾崎新編(1999)：「ゆらぐ」ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践. 誠信書房.

2. 「ゆらぎ」の教育

(1)高齢者福祉論 — 老いを「旅路」として捉え直す

1999年に本学に赴任して以来、担当してきた「高齢者福祉論」の講義において、「老い」をどのように定義し、学生たちとどのように向き合い、伝えていくべきかを問い続けてきました。月日を重ねるごとに、老いとは単なる肉体的な衰退ではなく、静かな希望や他者との深いつながりが立ち現れる過程そのものではないかと感じるようになりました。その到達点として、高齢者福祉論の一つの結論を、詩の形に整えてみました。

老いの風景—未来を見つめる旅路

老いとは

音もなくほどけていく時間の糸
その糸を淡い光がやさしく照らす
昨日までの歩みは、穏やかな余韻となる

ひとりで暮らす部屋の静けさ
家族の声が遠くなる日もある
それでも、人の温もりを求めている

誰かが描いた道すじの中で
その隙間からこぼれる声がある
「ここにいる」と、かすかなつぶやきが聞こえる
そっと差し出される手は、時に優しく
時に重く、心をゆらす

それでも、笑顔が交わる瞬間がある
人の存在は、確かな光を放ち続ける
かつての日々の記憶が手のひらからこぼれても
人としての光は消えない

老いることは、
問いかけであり、まなざしであり、希望の残響であり、
生きることの深さを知る旅路

その旅路に、誰かがそっと寄り添ってくれるなら
それだけで、今日を生きる理由になる
老いの風景は、私たちが見つめる未来のかたちとなる

老いを「終わり」ではなく「旅路」、つまり過程として捉えるまなざしの重要性を描いてみました。時間の糸がほどけるような感覚や、ひとり暮らしの静けさ、家族の声が遠のいていく日々といった老いの側面には、孤独や「ゆらぎ」が確かに存在しています。

しかし、その「ゆらぎ」の中にも、人がなお温もりを求め、自らの存在を確かめようとする声があることをみつめていきたいと思います。そして、

老いの過程において、寄り添う誰かの存在が、人の心に光をもたらすのではないか—その思いも詩に託してみました。記憶が少しずつこぼれ落ちて、人がもつ輝きそのものは失われない。このことを大切にしていきたいと思います。

老いとは、問いかけであり、まなざしであり、希望の残響でもあるのではないか。そう考えると、老いを生きるという営みには深い意味が潜んでいるように思います。そして、老いの旅路に誰かが

静かに寄り添うことが、その人が今日を生きる理由につながるのではないかと感じています。

老いを恐れや欠落から語るのではなく、生きていくことそのものの尊さを、丁寧に捉えなおしたい—その思いが根底にあります。老いの風景は、私たち一人ひとりの生のあり方を照らすとともに、未来に向けてどのような社会を築くべきかを考える上で、一つの示唆を与えてくれるのではないかと思います。

(2) ソーシャルワーク論

「ソーシャルワーク論」の講義や「ソーシャルワーク実習」を担当する中でも、対人援助の根底

には、言語化を拒む経験や、言葉に回収しきれない情動に向き合うという特質があることを繰り返して実感してきました。そのような状況において、人や社会との関係性はしばしば「ゆらぎ」をとともない、明確な答えや解決策はむしろ探し得ないものだと考えています。

こうした「ゆらぎ」の中で、クライアントに向き合いながら関係を構築していく営みこそが、ソーシャルワークの本質を探究する上で重要な課題です。これまでの実践経験や思索を踏まえ、ソーシャルワークの本質を改めて二つの詩として言語化してみました。

ソーシャルワーク論Ⅰ ふれられないもののそばで

言葉にならない空気が、関係の隙間に漂っている
寂しさの理由も、笑顔の奥にあるものも
その深さにふれきれない

それでも、離れずに見つめ続けること
それが、ほんの少しでも近づこうとする唯一のかたちかもしれない
たとえ、ほんとうには届かないとしても

記録の中に、小さなつぶやきは残っているか
専門職の言葉が、その声を覆っていないか
沈黙に耳を澄ませるとき
確かに何か、そこにある気がする

日常は整っていない
崩れたり、沈黙したり、見えなくなったり、彷徨ったりする
その中に踏み込むとき
迷いやためらいの奥から
小さな光が、静かに立ち上がってくる

ソーシャルワーク実践に内在する不可視性を問い直そうと試みました。ソーシャルワークは、本人の経験世界の理解を目指す支援過程でありながら、その全体にふれることは本質的に不可能です。人の感情や記憶、背景にある物語は、しばしば沈

黙として現れ、専門職に届くものはその断片にすぎません。それにもかかわらず、ソーシャルワーカーは「完全には理解しえない」という限界を受け入れつつ、その近くに立ち続けることが求められます。詩の前半では、その限界と向き合う姿勢

を象徴的に表現してみました。

また、ソーシャルワーク実践においては、記録化や専門用語によって、クライアントの微細な声が覆い隠される危うさが常に存在します。記録は支援を可視化する重要な手段である一方、そこで用いられる言語は専門家の枠組みに依存しやすく、クライアント固有の語りや沈黙の意味を損なう可能性を含んでいます。「小さなつぶやき」という表現には、専門職の言語編成に対する批判的なまなざしを込めました。

さらに、支援過程の実際は、理論化されたモデルのように整ったものではなく、途切れや彷徨いを含んだ不確実性の連続だと思えます。実践にお

ける迷いやためらい、そして「ゆらぎ」は未熟さの表れではなく、人間や社会の複雑性に応答しようとする過程の一部として捉える必要があります。

終盤に置いた「小さな光」は、この不確実性の只中で立ち上がる、クライアントの主体性や希望の兆しを象徴しています。「ゆらぎ」「不可視性」「語りえなさ」を欠如ではなく、実践を形づくる重要な前提として捉え直すこと—その視点を詩全体に通底させました。支援者はいつも「ふれられないもの」のそばに静かに立つことを求められます。その姿勢の中にこそ、ソーシャルワークの倫理性や他者理解の根幹があると思います。

ソーシャルワーク論Ⅱ ゆらぎの中に彷徨い立つ

この人生にふれていいのか
その重さに言葉が出なくなる
それでも立ち続ける
その姿勢が、支援のはじまりになると信じている

救うためではなく、ともに歩むために
対等でなくてもいい
同じ景色を見ようとする
そのまなざしが、届くことを願っている

理解できない日もある
振り回される日もある
その一つひとつのゆらぎの中に
支援の本質が潜んでいる

見えない思いに向かおうとするたびに
何度も立ち止まり、彷徨い始める
支援のかたちを探る営みは
いつもゆれている

ソーシャルワーク実践において支援者が直面する「ゆらぎ」の体験を、描こうと試みました。実際の支援では、クライアントの人生にどこまで踏み込んでいいのか迷う瞬間や、その重さに言葉を

失う場面が確かに存在します。「この人生にふれていいのか」「その重さに言葉が出なくなる」には、そうした倫理的・感情的な逡巡と、一方でまずそこに立ちどまる姿勢の重要性を示してみまし

た。立ち止まるとは、クライアントの人生に圧倒されつつも、そこから目を逸らさずに向き合おうとすることではないかと思えます。

続く「救うためではなく、ともに歩むために」は、ソーシャルワークの核心を象徴的に表してみました。支援とは「救済」ではなく、クライアントの人生とともに彷徨いながらも伴走する営みと思えます。しかし、その関係性は必ずしも完全な対等性の上に成り立つ必要はないと考えています。むしろ、異なる立場にあることを前提としつつも、「同じ景色を見ようとする」姿勢にこそ、相互理解や信頼の基盤が育まれるものだと考えています。これは、学生たちにも繰り返し伝えてきた、関係形成における大切な視点です。

「理解できない日もある」「振り回される日もある」は、ソーシャルワークの実践過程が非線形で不確実性を避けられないものであることを示してみました。計画や理論通りに行かないことの方がむしろ多く、迷いやためらいは常に内在しています。しかし、こうした「ゆらぎ」に向き合い、立ち止まり、問い直し、彷徨いながらも再び関わろうとする営みこそが、反省的実践(reflective practice)¹⁾の中核であり、専門職としての成熟を促す大切なプロセスだと考えています。

終盤の「その一つひとつのゆらぎの中に支援の本質が潜んでいる」は、支援者が「ゆらぎ」を体験しつつも、そして彷徨いながらもかわり続けること自体が、クライアントとの関係を深め、支援の意味を問い直す契機となることを示したい思いを込めました。完全な理解や確実な答えが存在しなくても、「ゆらぎ」の中に立ち続けることで初めて、関係の中に生まれる小さな変化や希望に気づけるのではないかと考えています。

これまでソーシャルワーク教育を積み重ねてきた中で、仮説的にたどり着いたソーシャルワークの原点は、社会や制度の解説や技法の適用にあるのではなく、制度と現実のあいだに存在する「結節点」に立ち続けることだと思います。社会が進展し、社会福祉の制度がどれほど整えられても、その外側には必ず制度には回収されない苦悩や、

行き場のない思いが彷徨っています。ソーシャルワーカーは、その彷徨いの只中に身をおきながら、制度の論理と人の生のあいだに生じるひずみを見つめ、言葉にならない声に耳を澄ませることを求められます。そこには明確な答えも、確かな道筋もありません。しかし、クライアントとともにその不確かさに向き合い続ける姿勢こそが、ソーシャルワークの原理であり、実践の核心であると考えています。

長い年月の中で出会った人々の沈黙やまなざし、その奥に潜む「ゆらぎ」は、学びであり、問いであり、道標でもありました。これからも、その結節点に静かに立ち続けながら、人が生きることの深さと希望を見つめていきたいと思えます。

引用文献

- 1) クリス・バルマン、スー・シュッツ編、田村由美、池西悦子、津田紀子訳(2014)：看護における反省的実践 原著第5版、看護の科学社。

3. 「ゆらぎ」の科学

「ゆらぎ」を詩に託したいという思いとは別に、一方で「ゆらぎ」を科学する姿勢も必要です。「ゆらぎ」の構造を解明する研究にも取り組みました¹⁾。簡単に「ゆらぎ」の構造を示すと図1のようになります。

「ゆらぎ」の根源には混乱が存在し、それは「わからなさ」「判断できない」「未熟感」として経験されることがわかってきました。これらの混乱は、「無力感」「不安感」といったパワレス状態に関与し、最終的には情緒的消耗につながる可能性が示唆されました。情緒的消耗は、時にバーンアウトという現象を引き起こし、離職につながることもあります。

だからこそ、「無力感」や「不安感」に直面したとき、私たちはその「ゆらぎ」に正面から向き合う必要があるのだと思います。この利用者のことについての的確に理解しなければならない、しかしなかなか理解できないという混乱は、まさに深い「ゆらぎ」にふれた瞬間です。そこで立ち止ま

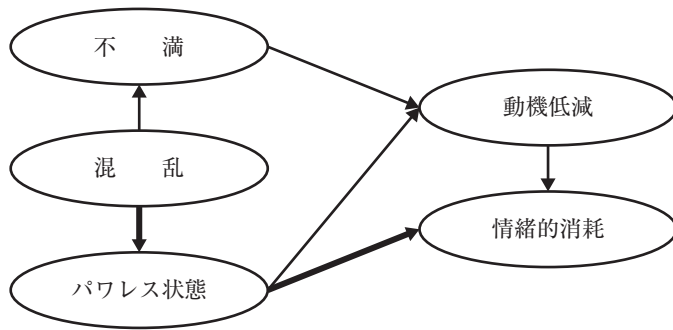


図1 「ゆらぎ」の構造（太線がもっとも強い関連性を表す）
 横山正博他（2009）：介護支援専門員の体験する「ゆらぎ」の構造方程式モデリングによる分析. 山口県立大学学術情報, 2: 1-12. の図を一部改変

り、まだ十分に理解できていないのかもしれない。もっと別の理解がありうるのかもしれないと立ち止まって自覚することが重要となります。その「ゆらぎ」を自分の内に許すことが、ソーシャルワーカーとしての誠実さにつながっていくのだと思います。

また、2012年頃からは、地域包括ケアシステムに関する研究を継続してきました。地域包括ケアシステムの本質を理解するうえで不可欠な概念は、community-based care と integrated care の二点に収斂すると捉えています。

このうち、community-based care は、WHO「アルマ・アタ宣言」に示されたプライマリ・ヘルス・ケアの四原則—①住民ニーズの尊重、②住民参加、③地域資源の活用、④包括的保健システムの地域実装—と軌を一にする概念といえます。

integrated care については、Shaw²⁹⁾らが提示したsystemic・normative・organizational・administrative・clinical の5側面が理解の手がかりとなります。これまでの研究において特に重視してきたのは、その核心をなすと思われるnormative integration（規範的統合）です。筒井³⁾の訳では、「組織、専門職集団、個人の間で価値観・文化・視点を共有すること」とされ、多職種連携が不可欠とされる医療・介護連携の成否を規定する根幹的要素ともいえます。

地域包括ケアシステムを構築する手法である地域ケア会議は、個別課題の解決とネットワーク構築を機能させる場であり、多職種が協働してケ-

スを検討することを通じて役割の明確化や成功体験の共有が促され、多職種による連携が実践的かつ強固になると説明されています⁴⁾。

この地域ケア会議こそが 規範的統合を形成する中核的な場であるとの仮説を立て、研究を進めてきました。アクションリサーチの手法を用い、中山間・過疎地域を対象とした地域包括ケアシステムに関する研究³⁰⁾では、研究者自身が地域ケア会議に直接関与するなかで、研究者・専門職・地域住民のあいだにミクロレベルの規範的統合が醸成されていくプロセスを明らかにしました。特に、このプロセスの中で、関与していただいた保健師の方が「私がかんばろうから一緒にやろう」という考えが必要と指摘したこと⁷⁾は規範的統合を形成する第一歩だと認識することができました。

さらに、博士論文³¹⁾では、地域ケア会議における規範的統合が「統一された支援の遂行」「多職種の視点を尊重した関係形成」「共通言語によるコミュニケーション」といった具体的な行動と関連することを、共分散構造分析によって示すことができました。

しかし、規範的統合は、多職種が協働の価値を共有していく過程そのものであり、その形成には常にゆれ動く多様な「ゆらぎ」が存在するとの仮説を立てています。この「ゆらぎ」こそが、地域包括ケアシステムの成熟度を左右する重要な指標であると考えています。今後は、規範的統合の過程における「ゆらぎ」の構造や生成条件をより深く探究していくことが必要であると認識していま

す。

研究者としての軌跡は、特定の理論を積み上げるといふより、現場で出会った人々の声や沈黙、そして制度と現実のあいだに生まれる「ゆらぎ」を問いつける過程そのものだったと思います。

引用文献

- 1) 横山正博他(2009)：介護支援専門員の体験する「ゆらぎ」の構造方程式モデリングによる分析. 山口県立大学学術情報, 2: 1-12.
- 2) Sara Shaw, Rebecca Rosen and Benedict Rumbold(2011): Research report An overview of integrated care in the NHS What is integrated care? Nuffield Trust, 15.
- 3) 筒井孝子(2014)：「地域包括ケアシステム構築のためのマネジメント戦略integrated careの理論とその応用」中央法規.
- 4) 地域包括支援センター運営マニュアル検討委員会(2022)：3訂地域包括支援センター運営マニュアル. 一般財団法人長寿社会開発センター.
- 5) 横山正博他(2015)：中山間地域の地域包括ケアシステム構築における規範的統合に関与する研究実践. 山口県立大学学術情報, 8: 121-133.
- 6) 横山正博(2018)：過疎地域の一人暮らし高齢者の実態からみた地域包括ケアシステム構築の課題. 中国・四国発！地域共生社会づくりの課題と展望 中国・四国社会福祉論文集：131-150.
- 7) 山口県立大学地域包括ケア研究会(代表：横山正博)編(2013)：やまぐち発！みんなで創る老後の暮らしー地域力を生かす「地域包括ケア」. 山口県立大学ブックレット第1号. 山口県立大学.
- 8) 横山正博(2020)：地域包括支援ネットワーク構築における多職種協働の態度構造に関する研究ー地域ケア会議の分析を通してー. 博士論文(山口大学医学系研究科).

参考文献

- ・山口県立大学編(代表：横山正博) (2019)：医療と介護の連携事例集ー地域包括ケアシステム

の構築に向けてー. 山口県立大学.

- ・山口県立大学地域包括ケア研究会(代表：横山正博)編(2015)：地域包括ケアシステムの未来構想図Ⅱ. 山口県立大学ブックレット第3号. 山口県立大学.
- ・山口県立大学地域包括ケア研究会(代表：横山正博)編(2014)：地域包括ケアシステムの未来構想図. 山口県立大学ブックレット第2号. 山口県立大学.

4. 未来を担う学生たちへ

(1) ソーシャルワーク実習ー学生たちの感謝の形ー

2025年8月から9月は例年になく猛暑が続きました。このような環境の中でソーシャルワーク実習を終えた学生たちが、実習指導者の方々に寄せた感謝の言葉を手がかりに、その思いをひとつの詩(226ページ)として表現してみました。実習の過程で学生たちが抱いた緊張や「ゆらぎ」、そしてそれを包み込むように向けられた実習指導者の方々のやわらかなまなざしの深さを、できる限りありのままに描きたいと考えました。

実習初日、学生たちは期待と同じくらい大きな不安を胸に、実習施設の扉を開いたのだと思います。「初めての対話」に向き合う張りつめた緊張感を、学生たちが実際にいただいた心の動きとして表現してみました。また、その不安を丁寧を受け止め、対話へと導いてくださった実習指導者の方々の姿を思い返しなが、その関わり確かさや深さも表現してみました。

実習の日々の中で、学生たちは多くの問いや迷い、そして「ゆらぎ」に向き合うことになりました。すぐに答えが見つからない経験や、迷いゆらぎながら歩くことそのものが学びの一部であることを、これまで学生たちと共に感じてきました。その思いも重ねながら表現してみました。また、実習指導者の方々が、学生の言葉や戸惑いや「ゆらぎ」を受けとめつつ、成長の可能性を信じて支えてくださったことが、学生たちの確かな歩みへとつながったのだと思います。

希望のまなざし(23日間のソーシャルワーク実習Ⅱの物語)

初めての対話には
わずかな緊張が漂っていた
言葉を探す気配が
耳を澄ませば聞こえるほどに
そっとゆれていた

問いが残る
時間とともにかすかに変化しながら
心の奥で、静かな波が立つ

迷いの中に立つたび
見えなかった景色が少しずつ現れてきた
答えではなく、
その過程でゆれる心が、人を動かしていく

希望はゆらめく
とどまることなく
出会いにふれて
心の色を変えながら、
誰かのまなざしに背中を押されて、
次の瞬間に 新たな一歩を踏み出す

さらに、学生たちに向けたわずかばかりの後押し
の気持ちも込めました。希望とは、まっすぐに
差し込む光というより、ときにゆれながらも道を
照らし続ける、ほのかなあかりのようなものだ
と感じています。実習の中で出会った人や言葉が、
これからの歩みを支える羅針盤となってくれたら
と願っています。23日間の実習で学生たちが見
つけた「希望のまなざし」が、人として、そしてソ
シアルワーカーとしての成長につながり続けます
ように。

(2)これから社会に旅立つ人へ/未来を担う人へ
旅立ちの季節にふさわしい卒業ソングを書いて
みたいと思い、自然の風景と学生の日々の姿を重
ねながら表現してみました。青空や夜空、風や星

といった自然を、節目のときに心に浮かぶ「記憶
の風景」として描いてみました。大学生活の中で
経験してきたささやかな喜びや小さな緊張、何気
ない会話の積み重ねなど、日常の一つひとつに息
づく豊かさを少しでも伝えることができたらと思
いました。

「青空の下で」は、共有した時間そのものがや
がて記憶の風景として輝くことを描いてみました。
「木々のささやき」や「風のメロディー」といっ
た比喩は、季節の移ろいだけでなく、ともに歩い
た日々が自然の営みと溶け合い、穏やかに残って
いく感覚を表現してみました。「夜空の下で」は、
未来への期待や理想を、遠く輝く星や銀河のイ
メージに託してみました。そして、希望と不安が
入り混じりながらも、その光に導かれるように歩

希望の誓い

青空の下で 君とみつめた
笑顔の瞬間(とき) 心に刻む
木々のささやき 風のメロディー
思い出の中 共に歩いた日々

夜空の下で 君と誓った
未来の理想 心に抱いて
星のきらめき 銀河の果てに
思い出の中 共に描いた日々

過ぎ去った季節に 君のやさしさが
彩りをくれる

流した涙は 心に秘めて
希望の道を 君とともに拓いて行こう
希望の轍を 君とともに刻んで行こう
いつまでも

き出す姿を表現してみました。

「過ぎ去った季節に 君のやさしさが 彩りをくれる」は、過去が思い出として閉じられるのではなく、誰かに向けられた小さな思いやりが、時を経てなお照らし返すという、心の静かな作用を表現してみました。ふとした言葉や視線、そばにいてくれた瞬間は、季節を越えて鮮やかさを運び、人生の節目でそっと背中を押してくれるのだろうと思います。

「流した涙は 心に秘めて」は、悲しみだけでなく、悔しさや安堵、言葉にならなかった思いの総体として表現してみました。それらの感情は他者に説明されなくても、確かにその人の内に残り、やがて新しい一歩を支える力へと変わっていく—そのような、涙が持つ内面的な静かな強さを描いてみようと思いました。

「希望の道」「希望の轍」には、これから歩む未来が、これまでの日々の積み重ねによって形づくられるという思いを込めています。喜びも迷いも

涙も、そのすべてがこれから生きる力に変わり、それぞれの記憶に残響し、明日へ向かう小さな道標になれば幸いです。

5. 人生の物語(結びとしてのリフレクション)

経歴書や業績調書に代えて、これまでの人生の一部を振り返ってみる試みです。経歴や業績の羅列ではなく、人生の節目でどのような思いを抱き、どんな選択を重ねてきたのかを、読書体験も含めて綴ってみます。履歴とは単なる事実の記録ではなく、人生の省察(リフレクション)そのものであり、自分を見つめなおす時間であり、機会ともいうべきものだと思います。

(1)なぜモンゴル語だったのか

高校2年の時までは、将来の進路も漠然としていました。ある時世界史の先生が、なぜか普段の授業とは異なる話をしてくださいました。あとで気づいたのですが、その話は井上靖の小説「敦煌」

の物語でした。なぜか、山口市の道場門前商店街にあった今は閉店された文栄堂で手にした文庫本を立ち読みしていると、そこに綴られていたのは、偶然にもその「敦煌」の物語でした。

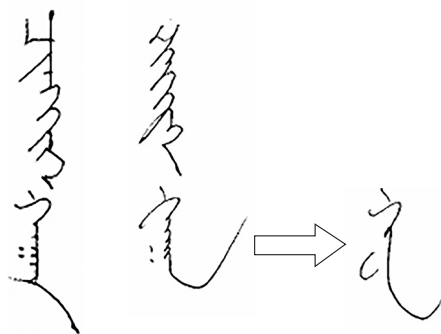
チベット系民族の李元昊が西夏を建国していく動乱の中で、主人公である趙行徳が仏教経典を敦煌の莫高窟へと運ぶ物語です。教科書の中のことでしかなかった「シルクロード」という世界が、急に生き生きと立ち上がってきました。

続いて、井上の「蒼き狼」を間髪入れず読みました。これは、モンゴル帝国の建国者であるチンギス・ハン(成吉思汗：Чингис хаан)の誕生から生涯を描いた小説です。戈壁砂漠を舞台に、周辺の遊牧部族を束ねていくその物語には、当時の遊牧社会の苛烈さが色濃く描かれていました。現代の価値観からは想像しがたい世界が描かれていました。

それでも、チンギス・ハンがモンゴル民族を統一し、戈壁砂漠から西方まで勇猛果敢に戦った生きざまを読みながら、心が震えたのを覚えています。現代の社会では受け入れがたい側面も含みつつも、歴史の只中に生きた一人の人間の生き方にいつのまにか傾倒していったのを記憶しています。そこから、井上のいわゆるシルクロードを舞台とした西域小説をすべて読みました。授業中に読んでいた時には、先生にひどく叱られた記憶があります。

この頃に、モンゴル語を勉強しようと思い、東京外国語大学外国語学部モンゴル語学科に進学しよう決めました。現在モンゴルではロシア文字が使用されていますが、縦書きのモンゴル文字(図2)で書かれた文献を読むことが最も楽しかった思い出です。一見すると不思議な文字を学ぶことの面白さがあり、今でも書くことができます。モンゴルやチベットの民話などを1回の授業で何ページも読まされたのですが、読むというよりも文字の形で解説していくといった感じです。

このように、高校の時に出会った井上の「蒼き狼」が大学進学の方角性を決定づけてしまいました。この話をすると、なぜ今、福祉なのですかと、だれからも判を押したように尋ねられます。



活字体 筆記体 さらに崩す

図2 モンゴル文字(チンギス・ハン)筆者直筆

(2)なぜ、モンゴル語から社会福祉なのか

大学2年生の頃、英語教員を目指していた先輩から、「これ面白いよ」と差し出された一冊の本がありました。福井達雨著「アホかて生きているんや」(教文館：1980)です。知的障害のある子ども達が生活している施設「止揚学園」の施設長を務めていた福井がその現場のリアルを率直な言葉で描いた著作です。

その中に、施設職員の言葉として次の一節が記されていました。「わたしたちの青春は、ウンコのクリームと、オシッコの化粧水にまみれている青春です」「ウンコやオシッコにまみれたって、楽しい青春はあるんです」。ここには、自分がこれまでに体験したことのない世界観が広がっていました。衝撃と同時に、不思議な力を感じました。単純に「ウンコとオシッコ」にまみれた青春をおくってみたい、将来は福祉の仕事をしてみたいと思いました。その思いに突き動かされるように、障害のある子ども達のボランティア活動にも参加したり、当時の養護学校に半年間通って卒業研究にも取り組みました。

さらにその後、本格的に社会福祉を学びたいと思い、上智社会福祉専門学校(夜間)、日本福祉大学大学院へと進学し、念願叶って知的障害者の施設で働くことができました。今思えば、福井の著作の根底には常に知的障害の子ども達、そして誰とでも「ともに生きていく」という現代に通じる

社会福祉の根本原理があったように思います。

大学院で社会福祉をさらに学ぼうと考える契機となった本は、孝橋正一著「全訂 社会事業の基本問題」ミネルヴァ書房です。「社会事業とは、資本主義制度の構造的必然の所産である社会的問題に向けられた合目的・補充的な公・私の社会的法策施設の総称であって、その本質の現象的表現は、労働者=国民大衆における社会的必要の欠乏(社会的障害)状態に対応する精神的物質的な救済、保護及び福祉の増進を、一定の社会的手段を通じて組織的に行うところに存す。」と記されていました。

当時、社会福祉を専門学校で学んでいましたが、どの先生もあまりふれてくださらなかったこの本の内容は、かなり衝撃でした。また、この本に大きな力を感じました。社会福祉を社会科学的の視点から学ぶ必要性を感じ、日本福祉大学大学院に進学しました。

修士論文のテーマは、「精神薄弱者福祉政策研究序説—精神薄弱者福祉法制定まで—」です。高校時代に読んだ井上の小説から始まり、大学2年生で出会った『アホかて生きているんや』を経て、長い時間をかけて積み重ねてきた問いが、ひとつの学修成果として形になった瞬間でもありました。

(3)大学院修了後のリフレクション

大学院修了後は、念願の知的障害者の方を対象とした施設、そして特養で働きました。さらにその後、宇部短期大学で介護福祉士の養成に携わり、その後本学に入職しました。この間の教員としてのリフレクションは割愛させていただきますが、本学でのリフレクションの一部は上記の詩に綴ってあります。

これまでの人生の岐路には、何らかの本が関係しています。その本を紹介しながら、簡単な一行リフレクションを綴りました。

-
1. モンゴルに関心をもった本
井上 靖「蒼き狼」新潮文庫
 2. モンゴル語から社会福祉へ転換させた本
福井達雨「アホかて、生きているんや」教文館
 3. もっと社会福祉、特に障害者の福祉を勉強してみたいと思った本
糸賀一雄「この子らを世の光に」柏樹社
 4. 大学院で学んでみようと思った本
孝橋正一「全訂 社会事業の基本問題」ミネルヴァ書房
 5. 人が生きる(人生)ということを考えてみようと思った本
高野悦子「二十歳の原点」新潮文庫
 6. 教育に関心を持った本
灰谷健次郎「兎の目」「太陽の子」理論社
鹿島和夫「一年一組せんせいあのね」理論社

7. 支援の本質をいつも考えさせられる、読むたびに新たな発見がある本
ミルトン・メイヤーロフ「ケアの本質」ゆみる出版
8. ソーシャルワークの根源に出会った本
尾崎新編「『ゆらぐ』 ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践」誠信書房
9. 最近名著だと思った本
筒井孝子「地域包括ケアシステム構築のためのマネジメント戦略 integrated careの理論とその応用」中央法規(博士論文の基礎的文献)
西村ユミ「交流する身体〈ケア〉を捉えなおす」日本放送出版協会
10. これからじっくりと読んでみたい本(本棚に積読状態)
エマニュエル・レヴィナス「全体性と無限」岩波書店
フョードル・ドストエフスキー「罪と罰」岩波文庫
ジャン・カルヴァン「キリスト教綱要」新教出版社
内田義彦著作集全10巻 岩波書店
宮田光雄集〈聖書の信仰〉全7巻 岩波書店
内村鑑三信仰著作全集全25巻 教文館
11. 完全読破を目指したい本(現在2/3読破)
内田康夫の浅見光彦サスペンスシリーズ

一部 山口県立大学図書館報 YPU Library から引用・改変

(4) 学生からの贈物

学生から受け取った言葉の中には、今でも記憶に残り続けるものがあります。その一つを紹介いたします。その言葉をくれた学生の名前や顔、その言葉を発した時の学生との位置関係、そしてその瞬間の心の動きまで、鮮明に思い出せる記憶があります。

「先生は、決して私たちを否定しないよね」という一言です。それは、自分では気づいていなかった姿勢を思いがけず映し出してくれたのだと思います。まったくそのことを意識して学生に接していたわけではありません。だからこそ、その言葉が最も強く記憶に残っているのかもしれない。

しかし、若い頃は、決してそんなふうではなかったと思います。焦りや未熟さの中で、誰かの思いを受けとめきれなかった日々、傷つけてしまった時もあつたはずです。その学生の言葉は、過去の自分への静かな反省となり、これからの教員としての道標にもなりました。あの時の声は、時間が経っても薄れることなく、今も心のどこかにとどまっています。その記憶が、日々の教員としての私を支え、迷

いそうになるときに、一つの方向を示してくれています。しかし、教壇に立つことが許されているのだろうかといつも自問しています。

次の詩(231ページ)は、その言葉への感謝と、そこから生まれた道標を忘れないために綴ったものです。誰かの言葉が、他者の内側でひそかに息づき続けることがあります。その小さな事実を、ひとつの形として残しておきたいと思いました。

6. 「ゆらぎ」の息づかい—結語に代えて—

これまで出会った多くの人々の表情、声、言葉が、ふとした瞬間に胸の奥に立ち上がってきます。学生、実習指導者の方々、施設の職員の方々、そして日々の生活のなかで生き抜いてこられた利用者の方々。その一つひとつ、一人ひとりが、教育という職業を続ける動機となっています。

長年みつめてきた「ゆらぎ」は、人が生きる証そのものであり、不確かさを抱えながらも人の営みを支えてきた小さな息づかいとも言えます。クライアントのことを完全に理解することはできな

贈られたことば

ある日

ひとつのことばが

そっと心にとどまった

否定しないという

ほのかな気づきが残響した

かつては

落ち着かぬ風のように

影を落とす日もあった

自分の気持ちさえ見失いそうになった

いまも

その気づきは

道標(みちしるべ)となり、

一步を踏み出す支えとなっている

くても、その近くに立ち続けようとする姿勢のなかに、支援の意味があると確信しています。

今後の目標として、介護現場で働く方々の「ゆらぎ」を詩として残していきたいと考えています。高齢化が進む山口県では、2035年に介護職員が3,423人不足すると推計されています(第8次やまぐち高齢者プラン:2024)。県長寿社会課の方とともに介護の現場を訪れたり、山口労働局の統計を分析したりしてきましたが、根本的な対策はなかなか見えてこないのが実情です。

2025年8月、訪問介護事業所を訪れた際、「人手は足りない、収益も厳しい。それでも自分たちの訪問を待っている人がいる、だから続けている」と伺いました。この言葉にふれたとき、その「ゆらぎ」や思いを社会に伝えていく必要があるのではないかと強く思いました。その場に漂っていた静かな決意と切実な「ゆらぎ」を、ぜひ言葉として残していきたいと思っています。

本学での役割には一区切りがつきませんが、学びとりフレクション、そしてチャレンジはこれからも続きます。人々の言葉の奥にある思いや風景を見

つめていきたいと思っています。これからもAIとともに言葉を探し、詩というかたちでその「ゆらぎ」の風景を描き続けたいと考えています。また、チャレンジすることの大切さを学ぶために、3年前からフルートを習い始めました。教育者は教えること以上に教えられることを学び続ける存在だと思います。

これまでの人生の転換期において、私の師として励ましや進路の助言をいただきました田嶋守先生(山口高校)、吉澤典男先生(東京外国語大学)、春見静子先生(上智大学)、児島美都子先生(日本福祉大学)、尾高重暉先生(しいのき学園)、五味百合子先生(日本社会事業大学)、山本圭介先生(山口県立大学)、加登田恵子先生(山口県立大学)、西村洋子先生(宇部短期大学/山口県立大学)に感謝申し上げます。

さらに、本学・宇部短期大学での34年間を支えて下さった方々は、枚挙にいとまありませんが、学生・卒業生・修了生のみなさま、教職員のみなさま、すでにご退職された教職員のみなさま、実習施設をはじめとした福祉・介護施設のみなさま、各職能団体のみなさま、縣市町行政のみなさま、そしてこ

れまでに出会った方々に心より感謝申し上げます。

Abstract

A Quest for the Depths of “Yuragi”

I have reflected on my trajectory in social work education, practice, and research through the lens of “yuragi.” In the fields of social work and social work education, there are many moments when one encounters unspoken emotions, hesitation, and uncertainty that cannot be fully put into words. I have sought to understand such experiences by conceptualizing them as yuragi, and by exploring them through both poetic expression and academic inquiry.

In addition, in my research on the community-based integrated care system, I have proposed the hypothesis that diverse forms of yuragi also arise in the process of interprofessional collaboration. I believe that these forms of yuragi can become opportunities to deepen relationships among professionals. Looking ahead, I hope to give words to the yuragi experienced by people working in care settings.

I am convinced that the core of social work lies in the stance of continuing to stand beside clients, even while wavering and wandering within uncertainty.



略歴

- 1961年 山口市生
- 1983年 東京外国語大学外国語学部卒業
- 1984年 大宅壮一文庫(世田谷区)
- 1988年 日本福祉大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了
- 1988年 心身障害者生活訓練施設(品川区)
- 1990年 特別養護老人ホーム(栃木県)
- 1992年 宇部短期大学家政学科生活福祉学専攻
- 1999年 山口県立大学社会福祉学部
- 2020年 山口大学大学院医学系研究科博士後期課程修了
- 2026年 山口県立大学定年退職

専門領域

高齢者支援学 地域包括ケア 介護人材確保

ソーシャルワーク実習

好きな言葉 希望 ゆらぎ 彷徨う

チャレンジ フルート